２０２２年度　ソニー幼児教育支援プログラム

「科学する心を育てる」

～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～

造形活動から見える科学する心

～アートと科学の融合する世界～

実践期間 2022 年 4 月～2022 年 7 月
対象 0 歳児クラスから 5 歳児クラス

社会福祉法人　種の会
幼保連携型認定こども園
エールこども園
園長　佐藤　裕子

目次

はじめに
　～エールこども園の「科学する心」を支える環境～

Ⅰ．造形活動から見える「科学する心」
　～「感じる心」と「科学する心」の融合

Ⅱ．はじめてを楽しむ　～乳児クラスの実践例より～
　エピソード①　　０歳児　これ、なにかな？　はじめての絵の具

　エピソード②　　１歳児　もっとやってみたい遊びにする環境　絵の具遊び

　エピソード③　　２歳児　それぞれの遊び　探求する姿になる
　　トイレットペーパーと絵の具

Ⅲ．心を動かす環境と出会う　～幼児クラスでの実践例から～
　エピソード④　　幼児クラス異年齢活動
　　もっとかっこよくしたい！いろんな表現を試す

　エピソード⑤　　５歳児クラス　きれいな色を感じたい

　エピソード⑥　　５歳児クラス　継続する遊びと探求心　色作り研究所

Ⅳ.「科学する心」を育む
　～エールこども園のこれからを見つめる～
　・科学する心を育てる
　・繰り返しやってみる
　・探求し続けることが出来る環境を目指して

はじめに　～エールこども園の「科学する心」を支える環境～

☆緑豊かな園庭　～学びを支える生きた保育環境～

３年前大阪府のみどりづくり推進事業で植栽し、400 本近い木々や宿根草などに囲まれた広い園庭は、四季折々に姿を変え、果実を実らせる木々や花々でいっぱいである。園庭の植物やそこに集う小さな虫は、園児にとって最高の生きた保育環境ともなっている。手作りのビオトープでメダカを飼育し、命の循環を学び、畑で野菜を育て、調理し、食べるという食育、農育の環境作りにも取り組んでいる。

☆異年齢活動と造形の部屋　～遊びの中の学びを目指して～

得意な事や苦手な事、好きな事や嫌いな事・・・子ども達の生活は毎日、葛藤の連続である。子ども達が主体的に活動するとはどういうことかを考えながら、いろいろな活動に取り組んできた。クラス活動だけではなく、縦割りの異年齢活動にも取り組み、乳児クラスは“ハッピーデー”、幼児クラスは“フリーデー”という縦割りの活動日を毎週一回設定している。

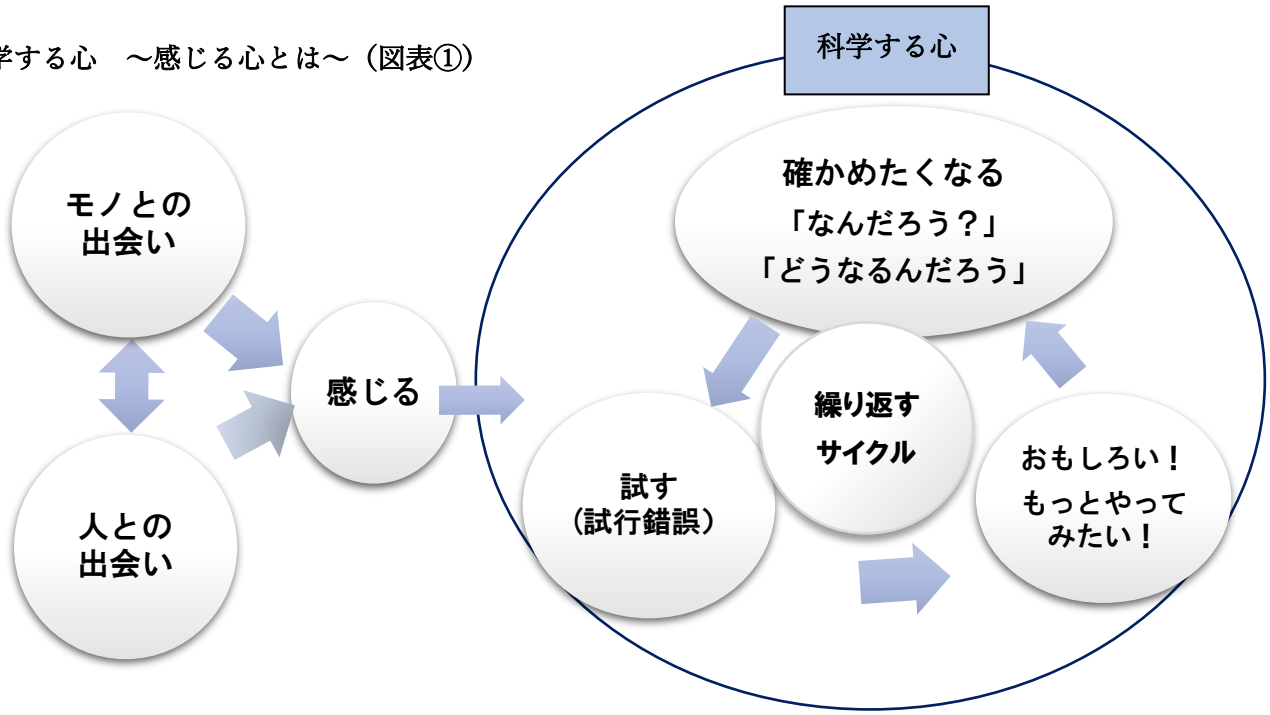
同時に、子ども達がより主体的に活動できる環境を作っていきたい、そのような思いから「自分から関わりたくなる環境」と「自分がやってみたいことを実現できる環境」を実現させようと幼児クラスの保育室内にあった造形コーナーから発展し、“造形の部屋”を設置した。当初は、空き箱や様々な廃材、画用紙やテープ類、ペンなどを並べただけの部屋であったが、もっと保育者も子ども達もわくわくできる環境にならないかと試行錯誤を繰り返した。興味をもった子が集まってくるうちに、友達の姿を見て触発され、“造形の部屋”での活動は大きく広がり始めた。絵の具で好きなだけぬたくり遊びを楽しむ子、空き箱やテープを使って自分のイメージしたジュースサーバーやゲーム機を作り、ごっこ遊びを始める子、絵の具を混ぜて色水作りに没頭する子・・・クラスや年齢を超えた関わりの中で、自分がやってみたいことをずっとやり続けられる場所として“造形の部屋”は、幼児クラスの保育には欠かせない場所として位置づいている。

Ⅰ　造形活動から見える「科学する心」　～「感じる心」と「科学する心」の融合～

「自分が選び、決めて、やってみる活動」まさに心が動きやってみたい、やりたいの活動こそが子ども達の「科学する心」の芽生えとなり、くり返し試し、探求することに繋がっていくのではないかと考える。作ったり、描いたりすることが中心であった“造形の部屋”での小さな経験の積み重ねが、子どもたちの心を大きく揺さぶり、いろいろなひらめきや発見が生まれる場所へと進化してきた。この“造形の部屋”での活動や遊びこそ、科学する心に繋がっていくのではないかと考えている。子ども達の「やってみたい」という心が動き、「自分から関わりたくなる環境」と「自分がやってみたいことを実現できる環境」の中で主体的に活動し、友達や保育者と対話しながら、造形活動を積み重ねてきた。また、その活動の中で、子ども達が大人の予想を超えた姿で、ひらめき、発見し、探求する姿を発揮している。子ども達が生活する環境の中には、いろいろな人やモノとの出会いがある。その出会いとの中で心が動いた時こそが、遊びや活動を豊かにしていく。身近な素材や友達、保育者＝環境と関わりながら、試行錯誤する中で「あれ？なんでこうなったかな？」「もう一回、やってみたい」と心が動き、自分が感じたことを表現する力こそモノとつながり、人とつながり「科学する心」に繋がっていくのではないだろうか。

水、砂、風・・・子ども達の生活の中には、さまざまに心が動くきっかけであふれている。体の様々な五感を働かせて感じることが、子ども達の心を動かすきっかけとなる。初めての光、初めての声、初めての匂い・・・初めてのモノに出会った時、子ども達はどのようにそれと関わり始め、何を感じるのだろうか。年齢や月齢によって、発達にも違いがある乳児の造形活動と「やってみたい」と強い願いを持ちながら試行錯誤する幼児の造形活動の中で、「科学する心」（図表①）についての実践事例をもとに考察していく。

科学する心　～感じる心とは～（図表①）



Ⅱ　はじめてを楽しむ　～乳児クラスでの実践例より～

乳児期は「はじめてのモノ」との出会いにあふれている。生まれて間もない乳児期の子ども達にとって、初めて触れるものは、どのように感じ、どのように試そうとするのか。乳児クラスでは、紙や粉、水、氷など、さまざまな素材を使っての感触遊びを繰り返し楽しんできた。その活動の中で、「これはなんだろう？」という発見から始まる遊びを通して、形を変えたり、感触や色、匂いなど五感を刺激しながら、子ども達が気付いたり、発見し、楽しみながら探求している姿が多くみられる。乳児クラスの子ども達との絵の具を使った感触遊びの実践例をもとに、乳児期の子ども達の「科学する心」の芽生えを考えていきたいと思った。

（考察）

五感に働きかける感触遊びは、乳児クラスの活動の中では欠かせない遊びの一つになっている。手指から伝わる感覚、自分の身体を使って表現する楽しさ、素材と関わることによって形を変える面白さや発見、言葉では伝えられない思いも「見て、見て！」とそばにいる保育者と視線が合うことで、見守られている安心感が、より遊びを充実させ、子どもの探求心に働きかけることができるのではないだろうか。

エピソード①　０歳児・・・これ、なにかな？・はじめての絵の具

自分の指先から感じる感触遊びを通して、ツルツル、ぬるぬると塗り広げながら、感触の面白さから発見する姿がある。目の前の画用紙にポトンと落とした絵の具も生まれて初めて見た様子。「なんだろう？」と指先で触れてみようとする（図①）まず、手のひら全体でつかんでみようとするが、思うようにつかめない。(図②) ヌルヌルする感覚を感じながら、画用紙にこすりつけてみると、思いがけずにひろがることを発見する。(図③) 手指についた絵の具が広がることに気が付き、改めて手を見つめたり、さらに塗り広げたり、「何かわからないもの」に対して口で確かめてみようとする姿もあった。

（図①）14 か月児

（図②）

（図③）

氷にした絵の具遊びでは、冷たい感触や固いものが解けて液状になり、どろどろになる感覚を感じながら、色が溶け合い混ざることも「面白い」と感じる。(図④・⑤)
「面白い」は意欲的な姿になり、遊びが「どうなるんだろう？」という試したり、確かめたりする活動にもつながっていく。(図⑥)

(図④) 15 か月児

(図⑤) 14 か月児

(図⑥) 8 か月児

思い思いの姿で楽しみながらも、そばにいる友達の様子を見たり、真似をしようとしたり、お互い影響しあいながら、同じ画面を共有する姿もある。

「科学する心」を支える保育者の視点（振り返りと気づき）

子ども達の「科学する心」には、「これ、なにかな？」という疑問が大きな役割を果たしているのではないか？気付きが好奇心となり、手指で触れてみたり、口で確かめたり、全身の感覚を働かせて感じる心が「科学する心」の芽生えとなり、集中して遊びを広げていく中で「もっと確かめてみたい！」という意欲的な姿や探求心に繋がっていくのではないかと考える。

（考察）
乳児期は、年齢や月例によって、手指の使い方など運動機能が異なる。また探索活動にも変化があると考えられる。「やってみたい」意欲と「わからない（経験したことがない未知の世界との出会い)」という戸惑いの中で子どもたちはどのように自分の好奇心を活動する力に変え、「もっとやってみたい」という気持ちを高めていくのか。

エピソード②　１歳児・・・もっとやってみたい遊びにする環境・絵の具遊び

絵の具を１色ではなく２～３色画用紙の上に落としてみた。指で触れるだけではなく、手のひら全体を使って、塗り広げようとする。(図①) 隣の色と混ざり合うことに気が付いた

時、大きく腕を動かしたり、手についた絵の具の色の混ざり方を確認するように見つめる。（図②）紙皿を渡して、画用紙についた絵の具をうつしとることが出来ることを知らせる（図③）。汚れたり、絵の具の感触が苦手な子も「やってみよう」としたり、簡単な方法で色の混ざり具合が模様になることに気が付いた子は「もう一回！」と繰り返してやってみようとする。「面白い！」と気が付くことが繰り返しの遊びに広がり、「もう一度試してみたい！」と探求する心に繋がっていく。

図①　１３か月児

図②

図③

楽しむ１歳児の様子

透明のアクリル板に絵の具を塗り広げる遊びの中では、これまで、くり返してきた絵の具遊びの経験を土台にして、好きな遊びとして「やってみたい」と、保育者の誘いかけに応じる。一緒に遊んでいる友達の姿を見て同じようにやってみたり、違う方法で試してみたりする。「見て、見て！こんなんになったよ！」とそばにいる保育者に知らせたり、「こっちがいい」と、色を選択したりする姿がある。子ども達は、自分が試したことに満足し、応答的な関わりを保育者に求めたり、友達の様子を観察する中で、さらに、探求する姿を発揮していく。

アクリル板に指で絵の具を塗ったり、自分の手のひらについた絵の具を見つめる１歳児の子ども達。

「科学する心」を支える保育者の視点（振り返りと気づき）

保育者が子どものやってみたい気持ちに気が付いた時、不安に感じていること（ヌルヌルは気持ち悪いなあ）を適切な環境（紙皿を使うと手が汚れない）の中で安心して活動できるようにすることで、好奇心を高めていくことが出来る。また子どもの表情、声、姿に応答的に関わりながら、友達や保育者と感じ方を共有し、「もっと、おもしろくする方法はないか？」と子ども達と一緒に探ることで遊びが広がっていく。

考察

自分の中でイメージしたことを試す中で、理想を実現するために試行錯誤する姿が芽生え始める。好きな色や形、感触などもこれまでの生活経験の中で、確かなものとして子どもの心に根付き始めている。積極的に活動を広げていく中で、「これ、〇〇みたい！」と自分が感じたものを形にして表現しようとしたり、反対に、自分が想像していなかったことに出会ったとき、子ども達の姿にはどのような変化があるのだろうか？

エピソード③

２歳児・・・それぞれの遊びが探求する姿になる・トイレットペーパーと絵の具

トイレットペーパーを引っ張ったり、破ったりする遊びの後、水糊を混ぜて、パルプ粘土にして遊ぶ。水分を含んだトイレットペーパーは、簡単に丸めることが出来るようになり、いろいろな形に変化することにも気が付く。赤い絵の具を混ぜると、今までクリーム色でしかなかったパルプ粘土が鮮やかな赤色に変化した。「いちごみたい！」と知っている果物の色や形に似ていることに気が付いた子どもが自分のイメージを言葉に変えて表現する。そして、自ら、ままごとコーナーのコップを探しだして、コップに丸めた赤いパルプ粘土を乗せて、満足そうに「いちごアイスが出来た！」その、嬉しそうに言う子どもの声に興味を持った子ども達が集まり、「アイスクリーム屋さんごっこ」へと遊びが広がり始めた（図①）。一方で、別の子どもは、水分を含んだトイレットペーパーの塊を握ると、絵の具の赤い水分があふれてくることに気が付いた。「ジュースにもなる！」塊を作っていく子（図②）、水分を集める子（図③）とそれぞれの姿で熱中する。

図①

図②

図③

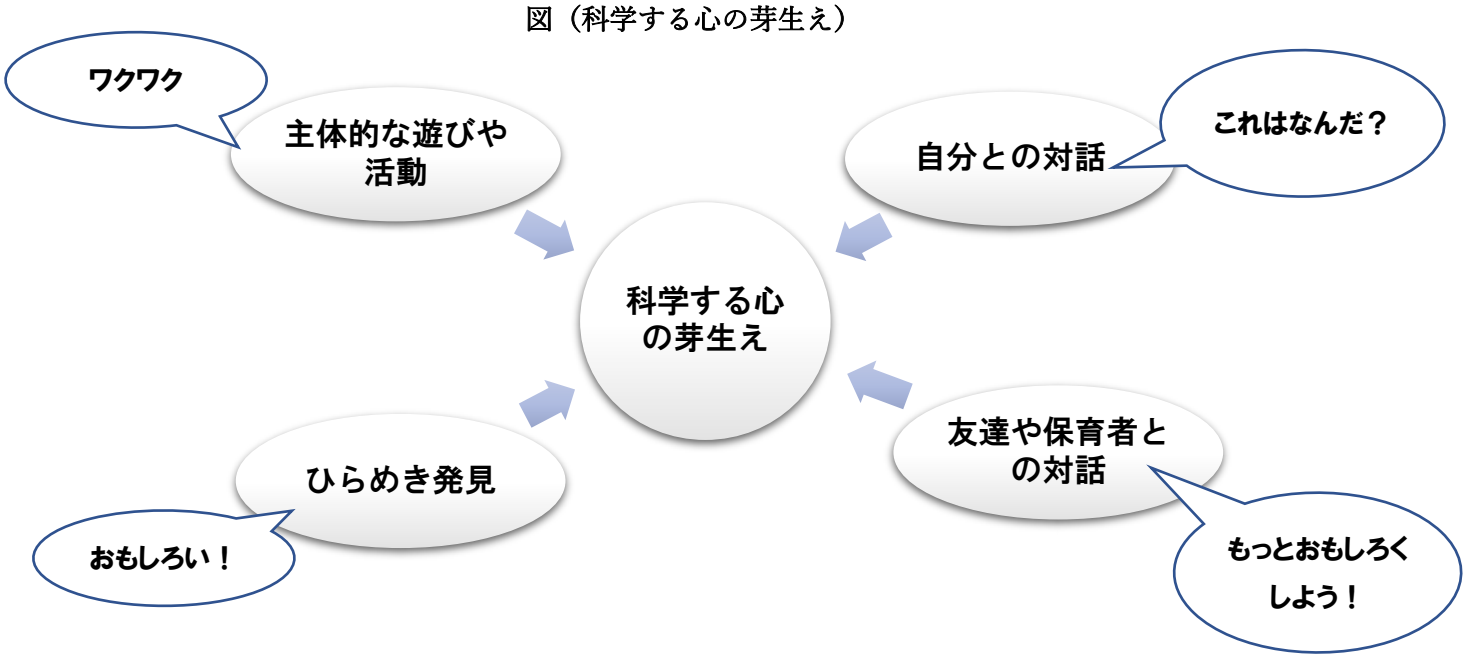
「科学する心」を支える保育者の視点（振り返りと気づき）

子ども達が遊びを広げていく中で、「これはこうしなければいけない。」というルールを作らずに、子ども達のひらめきや発見に応じることで、さらに新しい発見が生まれていく。保育者が介入しなくても子ども同士で新しい発見を見て、感じて、試して、学び合う姿がある。パルプ粘土の感触を楽しむことをきっかけにして、「丸くなるよ！」と塊を作り始め、「あれ？水が出てきたよ！」と気付き、「見て！見て！」と自分の発見を友達と共有し始め、「アイスクリーム屋さん」「ジュース屋さん」と自らが主人公になり、遊びを次々と生み出し始めた。自分のひらめきが新しい遊びになり、自分で考えた遊びの広がりが主体的な姿に繋がっていく。新しい発見は、次への挑戦のきっかけとなり、「またやりたい」という意欲になることが、見事に展開されていく場面でもあった。

「科学する心」の芽生え・・・「楽しかったから、またしたい！」

乳児クラスでは０歳児クラスから２歳児クラスの異年齢交流の中で造形活動を繰り返してきた。紙、水、粉、絵の具などの素材と保育者や友達との関わりの中で、「楽しかったから、またしたい！」というわくわく感が子どもたちの姿を積極的にしていく。その中で、乳児期において、「触れる・感じる・試す・繰り返す」という「科学する心」の芽生えを実感することが出来た。初めてのモノや人との出会いから、「これはなんだ？」という小さな発見をきっかけに、五感を通して確かめ、「感じる心」を大きく広げていく。形を変え、色の変化や感触の違いに気付くことで、「試してみる」という主体的な姿になっていく。友達の姿を観察しながら、「もっと面白くしようよ！」と対話的な関りにもつながっていく（図・科学する心の芽生え）乳児期での「感じる心」を土台にして、幼児期ではさらに自分の身の周りのモノや自然などの環境と深く関わり、目の前の様々な事象に敏感に反応し、心を動かし、「なぜ？」の気づきや学びを深めていきたい。

図（科学する心の芽生え）



Ⅲ　心を動かす環境と出会う　～幼児クラスでの実践例から～

乳児から幼児へと成長した子ども達は、乳児期で全身の五感を使って遊び、感じたことを土台にして、さらに手を使い、道具を使ったりしながら、自分の目の前の世界を変えていこうと試し続けていく。子ども達が、新しい環境に関わりながら、興味や関心を広げ、発見し、驚いたり、喜んだりする心の動きが、遊びを豊かにしていく。絵の具を使って描いたり、塗ったりする遊びは、汚しているのではなく、「感じる心」をより確かなものにしようと表現しているのだと思われる。「たくさん塗りたい」「たくさん遊びたい」は、「たくさん感じたい」という創造のはじまりではないだろうか。創造のはじまりは、さらに好奇心をかきたて、探求する姿に変えていく。自分の創造の世界をよりよく変えていこうとする意欲こそ「科学する心」ではないかと考えた。自分が思い描くイメージに近づけるために、「こうしたら、どうなるんだろう？」と仮説を立てながら、ダイナミックな活動と繊細な心を融合させながら、遊びや活動を広げる幼児クラスの実践例から「科学する心」を探っていきたい。

（考察）

絵の具を使った活動は、無数の色を生み出すことが出来る。筆やローラーを使った遊びは、自分が作った跡を確実に残し、それと合わせて自分の気づき（似ている色や色の濃淡）が様々な工夫を生み出し、子ども達自らが自然に「こうしたらいいんじゃないか？」という仮説を立て、試し、さらによくするためにはどうすればいいか試行錯誤していく姿にこそ「科学する心」があるのではないだろうか

エピソード④

幼児クラス異年齢活動・・・もっとかっこよくしたい！・いろいろな表現を試す

大きなクラフト紙をテーブルいっぱいに広げ、好きな色の絵の具を塗るぬたくり遊びをする。自分の描いた跡が線になって残ると満足気にしている姿から、様々な色が混ざりあう画面で、自然に色の混色遊びが始まる。「青いところに白をぬったら水色になったよ。」「もっと好きな紫を大きく塗りたいから、青を混ぜたらいいかな？」この日は、３歳児クラスから５歳児クラス合同で“造形の部屋”を使っての遊びの時間でもあり、異年齢で関わりながら、３歳児が５歳児の姿を観察している様子もある。逆に大胆に手のひらを使ってグルグル塗り広げる３歳児の姿を見て「楽しそう！」と５歳児が一緒に遊び始めていた。「もっと、かっこよくしたいな。」「丸い棒でコロコロしたら、好きな色が広がるんじゃないかな？」「プチプチ（緩衝材）もあったら、凸凹模様になるかも！」ひらめいたアイデアを次々とやって

みようとする。“造形の部屋”にある素材を自ら探してきて、「描いた跡が残る方法」「色がきれいに見える方法」を試していく。「水をもっと混ぜたらいいと思う！」と絵の具の溶き方にも探求する姿がみられた。（図・いろいろな表現を試す様子）

図（いろいろな表現を試す様子）

エピソード⑤　５歳児クラス・・・きれいな色を感じたい

遊びの中で、コップに少し残った絵の具を見つけた子が「色水していい？」と、水を入れてかき混ぜて絵の具で色を付けた色水遊びを始めた。これまでも、食紅などを使って色水遊びを何度か経験していて、子ども達が好きな遊びの一つでもある。水という自由自在に変化する素材も子ども達にとっては魅力的で、そこに色がついている水になると、さらにいろいろなイメージが膨らんでくると思われる。数人の５歳児クラスの子ども達が集まり始め、それぞれのコップに色水を作り始めた。スポイトを使い、丁寧に色を混ぜ、繊細に色水作りに集中する子ども達。自分の感じた「きれいな色」を目指して、遊びは継続されていく。「まだ、完成じゃないから、このまま置いといてほしい。続きがしたいから。」時間を忘れて、試行錯誤する子ども達の心には「感じる心」を大きくふくらませながら、同時に、「科学する心」を自ら育てていこうとする姿も確実に身に付き始めていることがうかがえる。

また、こうして、試行錯誤しながら探究活動をする様子を見ている３歳児クラス、４歳児クラスの子ども達にも継承されていくことも可能にできると考えた。

エピソード⑥　５歳児クラス・・・継続する遊びと探求心・色作り研究所

絵の具の色水遊びから「この続きはまたあとで・・・」と約束していた子ども達が集まり、再びいろんな色を作ってみようという活動が、造形の部屋でスタートした。「しきさい」のカードを見ながら、色にはそれぞれ名前があることを知った子ども達。

え～っ！全部ピンクやのに、全部名前が違うんや！

私は、「さくら」が好き！

あっ！これは知ってる名前やった！「みずいろ」ってこれなんや。

ピンクだけじゃないよ。「あお」もいろいろあるんだけど。

どの色がきれいかなあ・・・。

赤と青と黄色と白。この色で、自分の好きな色が作れるかなあ。

やってみた～い！！

私は、この色を作ってみる！出来ると思う！

これまでも、絵の具と水を混ぜて、好きなように色水を作る活動は繰り返してきたが、あらかじめ「目指している目標の色を作る」という活動は初めて。自分達でまず、赤・青・黄・白の絵の具を水でといて、色水の「原料」を作る。

赤と白を混ぜたらピンクになるんだけど・・・

そうそう！青と赤やったら、紫色になるんやで。

これまでの経験で知っていることを話し合いながら、スポイトで量を調整しながら、絵の具を混ぜていく。カードには見当たらない色が偶然できてしまって、「これ、きれいな色なんだけど・・・」という問題も発生した。「しきさい」カードだけではなく、カラーチャートも提示してさらに、複雑な色身を調整したり、子ども達が試行錯誤して出来た色水も活かされるようにしていく。

これとも違うし、これとも違うと思う。どうしたらこの色になるのかな？

「完成した！」と思った色水を「しきさい」カードやカラーチャートの横に並べて比べたり、友達に「どう思う？」と意見を聞いたりしながら、さらに、色を足してみたり、「どの色がいいかな？」と考えたりする姿。自分の経験してきたことと、さらに思いついたアイデアを使って、試行錯誤し続ける「色作り研究所」の活動は、好きな時間に集まって「さあ、やろう」と造形の部屋を基地にして、今も継続されている。

※補足・「しきさい」カード・・・「しきさい」リングカード（戸田デザイン研究所）

「科学する心」を支える保育者の視点（振り返りと気づき）

「絵の具遊び」「色水遊び」の二つの取り組みから、初めから結果を求めて活動を始めたわけではなく、遊んでいるうちに「もっとよくしたい！」という気持ちが大きく働き始めることが分かった。遊びや活動を進めていくうちに、保育者があらかじめ想定していた意図や活動から大きく飛躍し、子ども達は、「もっと、出来る！」と自信に満ち溢れた姿を発揮し始める。自分なりの「よりよい結果」を求めて、試行錯誤する中に、自分達が活動を進めている主体者だという意識が自然に芽生え始めていた。徹底的に自分達が納得できる「いい結果」を「感じよう」と心を動かし、必要な素材を集め、吟味しながら、複雑な探求も広がっていった。あくまでも主体者は子ども達自身であり、そばにいる保育者は、子ども達が困ったときには、さりげなくアイデアを提案したり、必要な道具や素材を準備し環境を整えていく「同じ時間を共有する共同研究者」である。（絵の具と素材）（絵の具と手）（絵の具と水）（絵の具と道具）を、様々な方法で扱い、繰り返し試し、「最高の結果」を求め続けていく姿にこそ、子ども達には「科学する心」が育っていると思われる。さらに、「色作り研究所」の活動では、自分の目指していることが明確になっている姿がうかがえる。自分のやってみたい活動に主体的に取り組みながら、「こうかな？」「こうじゃない！」「こうかも知れない。」と自分のひらめきや考えを中心に試行錯誤が始まり、「どう思う？」と友達や保育者に意見を求め、さらに探求する活動が再開し、継続されていく。これこそ「科学する心」ではないかと考える。

Ⅳ　「科学する心」を育む　　～エールこども園のこれからを見つめる～

私たちエールこども園の保育者は、これまでもいろいろな方法で子ども達の「やってみたい！と子ども達自身が意欲的に生活を作っていこうとする主体的な姿」「活動や遊びの中で育つ学びへの意欲」を探ってきた。そして、「おもしろいから、もっとやりたい！」という「感じる心」こそが子ども達の「科学する心」の始まりであり、その心の継続こそが子ども達の「生きていく力」に繋がっていくと考える。

☆感じる心を育てる☆

・乳幼児期の子ども達は、自分の身の周りのすべてのことから、学ぼう、知ろうとする姿で関わり始める。自然の風、音、光、匂いなどとの偶然の出会いを経験する日常の中で「これはなんだろう？」と気付き「知りたい。確かめたい。」と探求する心が芽生える。「感じる心」は「発見やひらめき」を生み、触れたり、握ったり、壊したりする姿は、自分の身の周りの物や事象、現象を知りたいと願う心の大きな揺れであり、したい遊びを夢中になって遊ぶ姿には「科学する心」が確実に芽生えている。
・保育者は、子ども達のつぶやきやまなざし、心の動きに気付き、子ども達が満足できるまで見守ることが大切である。思ったような結果を得ることができるまで付きあってくれる保育者と探求する子ども達の間にこそ、信頼関係が生まれ、「科学する心」への導きとなる。

☆繰り返しやってみる姿を見守る☆

・乳幼児期の子ども達の中には「上手く出来ない」という戸惑いを持つ姿もある。子ども達はモノとの出会いをきっかけにして、成功や優れた結果を目指しているわけではなく、いろいろな遊びを繰り返しながら、「こうしたらどうなるかな？」「もっと上手くできないかな？」と願い、試行錯誤を繰り返している。試したり、考えたりする活動の積み重ねの中で、「すごい！大発見！」という自分なりの成功にたどり着く。その成功経験によって、「感じる心」は心を大きく動かし、誰かに伝えたくなる。自分なりの表現を保育者や友達に知らせたとき、「すごい！」「面白い！」と共感し、興味関心を持ってくれたことが喜びとなり、さらに次への挑戦に向かう心意気につながる。
・保育者は子どもたちが試そうとしている姿を見守りながら、「困ったなあ」と戸惑っている時、子どもの行為や言動を肯定的にとらえて提案したり、気づきを言葉に変えていくことで。「もう一度やってみたい！」という気持ちを育んでいくことが出来る。その繰り返しの中にこそ「科学する心」が生まれる。

☆探求し続けることが出来る環境を目指して☆

・子ども達は、世の中のあらゆることに「なぜ？」「どうして？」と疑問を抱き、確かめようとしている。「これはなんだろう？」という子ども達のまなざしの中にこそ「主体的な姿」を見出すことが出来、「もっと知りたい！」と「感じる心」こそエールこども園が考える「科学する心」である。保育者は「もっと知りたい！」と願う子どもたちの心を受け止め、探求し続ける姿を見守ることを大切にしながら、日々の活動や遊びを見守ってきた。友達や保育者との活動や遊びを積み重ねる日々は、子ども達の「感じる心」をさらに豊かに広げていくことができ、より深い学びに繋がっていく。

・学びの意欲を育て、「学ぶこと（知りたいと思うこと）はおもしろい！もっとやりたい！」と「感じる心」を形成するプロセスが実現できる場所としての環境は重要である。今回、エールこども園の造形活動はその子ども達の学びを支える環境として、大きな役割を果たしていることが実感できた。「また、やろうね」と約束した乳児クラスの絵の具遊び、「もっとかっこよくやろう！」と試行錯誤を繰り返した幼児クラスの活動、そのどちらともが、子どもたちの「知りたい」のきっかけを作り、自分なりの成功や正解が見つかるまで探求し続けることが出来る環境であると考えている。子ども達が自ら見つけた大発見を探求し続けられる環境を「どうして？」「こうかな？」と保育者自らも、子ども達と共に、これからも探求し続けていきたい。

研究代表者　　田中　満秋子　　上野　昌代